

「だらだらサマー」

作…ササキタツオ

《登場人物》

花音ちゃん (17) 高校2年生
 堇ちゃん (17) 高校2年生

高本智恵 (17) 高校2年生
 神谷くん (17) 高校2年生

陸人くん (17) 高校2年生
 翔也くん (17) 高校2年生

三上くん (17) 高校2年生
 冴木里佳子 (17) 高校2年生

茜ちゃん (17) 高校2年生

《あらすじ》

ある高校の17歳・高校2年生の生徒たちによる、とある夏の一日の出来事である。退屈で死にそうな日をどうやってやり過ごすのか。どうしたら生き延びることはできるのか。そこに命を懸け、青春を燃やす高校生たちの、だらだらで、グダグダで、グズグズな会話の応酬劇。恋路も混じって、エスカレート!?

花音と堇はグダグダトークをする女子友達。智恵は、遅刻の王子様こと、神谷君に片思い中である。

男子勢の陸人と翔也はクラスの高嶺の花である、冴木里佳子に告白する真面目男子・三上くんの動向を気にしている。

また、翔也の恋人・茜は翔也の浮気を疑っていて問い詰めようと思っている。

さらに、里佳子は小学校からの幼馴染である陸人のことをずっと思いを秘めてきたことを今日伝えようと考えていた。

だらだら青春グラフィティ!

《全11場面》

- 1 「サボろうぜ」
- 2 「遅刻の王子様 前編」
- 3 「体育サボりの恋バナ」
- 4 「告白チャレンジャー!?!」
- 5 「だらだらサマー」
- 6 「女子たちの恋愛事情」
- 7 「恋の駆け引き」
- 8 「男子会談」
- 9 「孤独にロックオン!?!」
- 10 「遅刻の王子様 後編」
- 11 「本気の夏がやってくる!?!」

#1「サボろうぜ」

○高校の中庭 始業の予鈴

ベンチに花音（17）と董（17）が座っている。

それぞれにペットボトルを持っている。

花音「あーあちいーだりー」

董「だりだりー」

花音「だりだりだりだりーい」

董「だりだりだりだりだりーい」

花音「何回言った？」

董「ええと……（指折り）3、4回？」

花音「もうダメだわー。だりいわー」

董「だよねー」

花音「今日の授業なんだっけ？」

董「えーと、1限英語、2限数学、3限生物

……あと……ええと……なんだっけ？」

花音「さぼろっか？」

董「また？」

花音「いいじゃんー減るもんじゃなし」

董「よくないよー単位危ないっしょ」

花音「別にテスト頑張ればよいではないかー」

董「テスト頑張れないから、よくないではな

いかー」

花音「そういうこともあるが、たまにはよく

よくないことはないではないかー」

董「え。どっちだよ」

花音「さぼろー」

董「えー。どうしよー」

花音「それ、迷ってるフリして出るパターン

のどうしよー？」

董「フリじゃないよ。真剣モード、スイッチ

オンしてるしー葛藤中！」

花音「悩め悩めー。私の心はもう決まってる

んでー」

董「うーん。どうするかなあ……。つてかさ、

さぼってどうする？」

花音「えー。なにしようかねえー」

董「そこ、考えてないんかーい」

花音「考えてよー。暑さで思考回路停止中な

んでー」

董「だったら、授業いこうよー。なにするか

考えるのもめんどいし」

花音「えー、じゃあ、脳みそ回転させよー」

董「そこで回転するんかい！」

花音「だって、授業眠いし。どうせ寝るんだ

つたら、時間の無駄じゃねえ？」

董「寝なきやいいじゃん」

花音「起きてたら起きてたで、私、なんでこ

こにいるんだらうって、思うし」

董「それは、だいが暑さきてるねー」

花音「きてるかな？」

董「きてる」

花音「ああ。なんで授業って退屈なんだろう」

董「興味ないからじゃね？」

花音「興味はあるよー」

董「え！？ あるの！？」

花音「え！？ ないの！？」

董「私はあるよ」

花音「え！？ あるの？」

董「あるよーあるある」

花音「赤点同盟じゃんー」

董「赤点なのは何かの間違いなんだよなあ。

いつも問題が難しすぎるんだよ」

花音「あー。わかる。それはあるよねー」

董「だよねー」

花音「ああ。あついしなあー」

董「あついからねえー」

花音「海は？ どうよ？」

董「お。ブルーオーシャン！？」

花音「海よくない？」

董「え。でも、どれくらいかかるかな？」

花音「ん？ 時間？」

董「大事じゃね？」

花音「そうだなあ。江の島とか。ここから2

時間ぐらいかな？」

董「うわ。2時間とか？ マジで映画じゃん。

ムリー」

花音「よくない？ 電車でゆらゆら2時間旅

行！」

董「着く頃にはお昼じゃん。灼熱オーシャン。

地獄だろ」

花音「あー。それはそうだなあー」

董「まあ練馬も関東平野の内陸部だからな」

花音「今日も最高気温更新するんじゃね？」

董「光化学スモッグ出るんじゃね？」

花音「熱中症注意だな」

董「やっぱ、あついでねえー」

花音「てりやきか、むしやきか」

董「ハンバーガーかっ！？」

花音「それは《てりやき》だけなー」

董「正確なツツコミ、あざっす！」

花音「頭回ってきたかも！」

董「いい感じじゃん」

花音「とりあえず、涼みたいな」

董「確かに」

花音「コンビニ！」

董「アイス！？」

花音「イエス！」

董「んじゃ、脳みそ冷却しに行きますか」

花音と董、去る。（続）

#2 「遅刻の王子様 前編」

○高校の中庭 1限

高本智恵（17）がベンチの前で右往左往している。

予鈴が鳴り響く。

その間も智恵は右往左往している。

予鈴が鳴り終わる。

智恵のMO「今日も、彼を待つ。絶対1限に間に合わない、ギリギリ・アウトの神谷くん。一緒に遅刻してやっている私の身にもなってみろ！ あー。くそう。今日も来ないなあ！」

神谷（17）が欠伸をしながらやってくる。

神谷「高本。よつす」

智恵「よつす。じゃねえ！」

神谷「じゃあ。うす」

智恵「うす。でもねえ！」

神谷「えー。……あ、おは！」

智恵「おは！ って、そういうことじゃねえ」

神谷「どういうこと？」

智恵「今日も重役出勤ご苦労様ー」

神谷「あー、そっちこそ、今日もギリギリ遅刻ご苦労様」

智恵「はあ!？」

神谷「高本も遅刻組、だろ？」

智恵「一緒にするな」

神谷「いや、一緒だろ」

智恵「正確には一緒じゃない。一緒にならざるをえない状況になっているのです……」

神谷「なんだかややこしいな」

智恵「とにかく。予鈴終わったから、急ご！」

神谷「えー。ゆつくり行こうよ。どうせ、一限始まるの、だいたい5分遅れるじゃん」

智恵「まー。それはー。そうかもしれないんですけどー。でもでも、どうせ、とか、そういうの良くないと思うなー」

神谷「今日は絡むな」

智恵「（急に乙女に）えー!? そう……?」

神谷「俺、めんどいの嫌いなんだよな」

智恵「わ、私も!」

神谷「遅刻したって別に良くない? 何か悪いことしているワケじゃないんだし」

智恵「そ、そうだね」

神谷「でしょ?」

智恵「う、うん……」

神谷、ベンチに座る。

智恵、絶望。

智恵のMO「嫌われたくなくて神谷くんのペースに飲まれてしまった。いや、飲まれる

な、私、負けるな、私! そうだ、大事な事を。今日こそ、大事な事を伝えるんだ!」

智恵、神谷の隣に座る。

智恵「神谷君」

神谷「ソラ（と空を指さす）」

智恵「え?」

神谷「すげー。青じゃね?」

智恵「（見上げて）ああ……」

神谷「今日のはのんびりこのままでもいいかもな。高本もいるし」

智恵「えっ……!? 全然よくないから!」

神谷「つれないなあ」

智恵「神谷君。大事な話があるの」

神谷「え? 何?」

智恵「私ね……私……もう一緒に遅刻はできない」

神谷「え? なんで?」

智恵「それが……」

神谷「転校するとか?」

智恵「違う」

神谷「部活始めるとか?」

智恵「違う」

神谷「じゃあ、何?」

智恵「ただ、私の問題。もう一緒に遅刻できないな、って」

神谷「なら、別に、いいけど」

智恵「え……」

神谷「頼んだわけでもねーしな。高本がそうしたいなら、そうするのがいいと思う」

智恵「そうなんだけど。そこは引き留めようよ。遅刻する者同士さあ」

神谷「え? なんで? 遅刻するかどうかは

高本の自由意思だろ。俺にその決定権はねえよ」

智恵「そーなんですけどねー」

神谷「あ。わかった」

智恵「え!？」

神谷「高本、俺に引き留められることで、遅刻の言い訳にしたいんだろ?」

智恵「そ、そそそんなこと!」

神谷「そういうことなら、いくらでも理由にしてくれていいぞ」

神谷、伸びをする。

神谷「今日はまた暑くなりそうだな」

智恵「確かにね……」

神谷、空を見上げる。

智恵、神谷を見て、空を見上げる。

智恵のMO「もうなんなん。ああ。くそう。私の中で神谷くんは遅刻の王子様なのだ!」

(続)

#3 「体育サボりの恋バナ」

○高校の中庭 2限

体操着の陸人（17）がやってくる。

息を切らしており、ベンチに座る。

水のペットボトルを2本持つて体操

着の翔也（17）がやってくる。

翔也「おつかれー」

翔也、1本。ペットボトルを陸人に渡す。

陸人「さんきゅー」

水を飲む翔也と陸人。

陸人「つてか、俺たちだけ抜けてきてよかつた系？」

翔也「いいんじゃないね？ サッカーだし」

陸人「サッカーつてそういうゲームだっけ？」

翔也「二つのチームから一人ずつ抜けたんだから、ま、平等だろ」

陸人「さすが翔也、天才」

翔也「あざっす！」

陸人「あーそれにしてもひでえ暑さだよなあ」

翔也「確かになんなんだろうな」

陸人「雨でも降らないかな」

翔也「あれ？ 今日、ゲリラ豪雨の可能性6

0%だつて」

陸人「え！？ マジ！？」

翔也「マジ」

陸人「うわー。俺、傘持つてきてないわー。

終わった……！」

翔也「ま、朝のニュースで、60%だから今

はわからんけどな」

陸人「え！？ ナウ降水確率は？」

翔也「スマホ、教室」

陸人「うわー。マジか……（切り替えて）

や、うん。これだけ晴れてるんだから、絶

対大丈夫。うん。大丈夫つてことで！」

翔也「謎のポジティブシンキングだな。ま、

ひと雨降れば、この暑さも少しは和らぐん

じゃね？」

陸人「俺は可能性を信じる。雨が降らない4

0%の可能性を信じる」

翔也「可能性と言えはさ、三上の例の件、今

日だったよな？」

陸人「ああ……（思い出して）あつ！ 今日

だよ！ 今日！ もう今日じゃん！」

翔也「アイツ、マジで告るの？」

陸人「三上はさ、夏休み入る前にこの思いに

決着をつけるんだ、って意気込んでたから

な。もう呼び出しの手紙を送ったとか、な

んとか聞いているけど」

翔也「相手つて……あれだろ？ クラス委員

の？」

陸人「冴木里佳子」

翔也「それ、マジで……やべえな……」

陸人「だよな」

翔也「やばすぎるだろ。俺の聞いた話では、

冴木里佳子は、鉄壁の潔癖だつて話だぞ」

陸人「鉄壁の潔癖！ ガチガチの堅物！」

翔也「俺の1年とき同じだったヤツも告った

んだけど見事撃沈。告られている回数だけ

だったら、冴木里佳子はダントツかもな」

陸人「三上の勝算はゼロに近い……なんで突

撃するかねえ……」

翔也「可能性があるとしたら、三上も同じク

ラス委員だつてところか……」

陸人「確かに。距離は近いのかもしれない。

もしかしたら何か勝算があるのか？」

翔也「ないだろ。厳しい戦いになることは間

違いない」

陸人「当人、負けられない戦いだつて言つて

たんだよなあ……」

翔也「可能性ゼロだろ」

陸人「俺は……勝利の可能性を信じたい」

翔也「それもいいけどさ。散ったら、慰めて

やろうぜ」

陸人「心の準備しておかないと！」

翔也「お前が緊張してどうする！？」

陸人「確かに。ああ。みんな浮かれていい

よなあ……俺も恋してえ」

翔也「陸人は奥手過ぎんだよ。三上みたいに

アグレッシブにグイグイいかないよ」

陸人「グイグイで失敗するのも怖いだろ」

翔也「失敗するかもしれないけど挑戦しない

ことには成功もない」

陸人「それはごもつとも……。そっちはいい

よな。可愛い彼女がいて。茜ちゃん。可愛

いし性格いいし」

翔也「まーなー」

陸人「あー。夏休み前のサプライズに……誰

かいけない？」

翔也「誰でもいいうちは誰とも付き合えない」

陸人「そういうもんかね？」

翔也「陸人はそう」

陸人「俺、限定かよ」

翔也「恋つて、ビビつと来るものがあるんだ

よ」

陸人「茜ちゃん？」

翔也「ビビつときたね」

陸人「マジかー」

翔也「マジだー」

陸人「俺にも来るかね、ビビつとー！」

(続)

#4 「告白チャレンジジャー？」

○高校の中庭 3限

三上「(17)、手紙を取り出す。

三上「『拝啓、冴木里佳子さま。一緒のクラス委員になって、アナタの真面目なところに惹かれました。あなたのことが好きです。僕とお付き合いです。』……よし！ よし！ よおし！」

三上、里佳子の気配に気づいて、あわてて手紙を懐にしまう。

やってくる冴木里佳子(17)。

三上「あ。冴木さん」

里佳子「三上君」

三上「来てくれたんだ」

里佳子「困るよ。授業中に中庭で待っていません、とか。抜け出すの、大変だったんだから」

三上「授業中じゃないと、目立つし、二人きりとか難しいと思っただけ」

里佳子「……話して？」

三上「その……」

里佳子「私。告白とからなら、いらぬ」

三上「……」

三上の傍白「え。秒でフラれる!？」

三上「いや、待ってください！」

里佳子「何？」

三上「どうして告白だと思うんですか？」

三上の傍白「粘れ、粘れ、粘るんだっ！」

里佳子「違うの？」

三上「どうしてそう思われたのかなーって。

僕はそんなつもり」

里佳子「だって、二人きりの呼び出し、でもん。それしかないっていうか。そのパターンしか知らないっていうか……」

三上「ぼ、僕は、そんな他の連中とは違ひますよ」

三上の傍白「違わない、けどな！」

里佳子「違うの？」

三上「違います！」

三上の傍白「違わない、けどな！」

里佳子「じゃあ何の用？」

三上の傍白「うお。何話せばいいんだ!？」

三上「ええと……それは……」

三上の傍白「考えろ。考えろ。あ！」

三上「僕、クラス委員。辞めたくて！」

里佳子「え？」

三上「みんなの代表って辛くないですか？」

里佳子「そんな話のために呼び出したの？」

三上「ダメ、ですか……?」

三上の傍白「ダメだろー。そうだろ！」

里佳子「なるほどね」

三上の傍白「通った！」

里佳子「三上くんって、よっぽど真面目なんだね」

三上「え。えっ!？」

里佳子「そう、じゃないの……?」

三上「そ、その通りです！」

三上の傍白「全然。そんなことねえ。不純な動機でアナタを呼び出していますけど」

里佳子「そんなことだと思わないから。私、

誤解しちゃってなんかゴメン」

三上「い、いえ」

三上の傍白「なんだ。ある種のピンチを脱したけど、告白的にピンチであることには変わりないのか!？」

里佳子「私は辛いならやめてもいいと思う」

三上「え……」

三上の傍白「そんな誰でも代わりがとまるようにあつさりと相棒を切り捨てるんですか!？」

三上「で、ですよ……」

里佳子「それが相棒としての私の意見」

三上の傍白「相棒だと思ってくれていたのかあー! マジか! 嬉しすぎて死ぬ！」

里佳子「それじゃ」

三上「え!?! あ、待って！」

里佳子「何？」

三上「あの……」

里佳子「ん？」

三上「あの、もしこれが告白だったら？」

里佳子「え？」

三上「あ。もしも、こういうシチュエーションって冴木さん、経験多いのかなって、そんな気がしたんで。いつもどうしてるのかなーって」

里佳子「うーん。そうだね。私、全力でそのひとの事否定して、嫌いになってもらってる(と笑顔である)」

三上「え……」

里佳子「私、心に決めた人がいるから。その人にさえ気持ちを通じれば! 他の人にどう思われても構わないから」

三上の傍白「ガーン! 誰だそいつ!」

傷つき倒れそうな三上。

里佳子「じゃ、またクラスでね」

三上、茫然と。

里佳子、笑顔で手を振って去る。

三上、茫然と。

三上の傍白「なんてことだ。俺は、結局、間

接的にフラれた!」

がくりとその場に崩れる三上。(続)

#6 「女子たちの恋事情」

○高校の中庭 昼休み

茜ちゃん(17)がベンチに座って本を読んでいる。

里佳子がやってくる。

里佳子「茜」

茜「里佳子ちゃん！ 私、もうダメだわー。

死ぬわー」

里佳子「え。どうした？」

茜「聞いてくれる？」

里佳子「私で対応できる範囲の事なら」

茜「彼氏、のことなんだけど」

里佳子「それは対応範囲外」

茜「聞いてよ」

里佳子「範囲外」

茜「聞いてください」

里佳子「いい助言はできないかもよ……？」

茜「聞いてー」

里佳子「……わかった」

茜「彼、浮気してるの。気づいちちゃったんだ

よね」

里佳子「浮気！？」

茜「うん……」

里佳子「何そのクズ。速攻で別れた方がいい

し。死ねばいいね」

茜「里佳子ちゃん。それはそうだと思うけど。

ずっと付き合ってきた彼なの。彼にも彼の

言い分があると思うんだよね」

里佳子「え。でも。浮気でしょ？ 裏切りで

しょ？ 死ねばいいよ」

茜「浮気って言っても、その……メッセー

ジのやりとりしてるだけかもしれない……」

里佳子「茜……。じゃあ、聞きますけど、浮

気の境界線の定義はどこからですか？」

茜「え……？」

里佳子「キスをしたら？ 手をつないだら？

恋人的言葉を交わしたら？ メールのやり

取りをしたら？ 一緒に下校したら？」

茜「ええと……」

里佳子「いざれにしても下心があったらそれ

は浮気です」

茜「でも、友達って線も……」

里佳子「茜。一体どっちのなの？」

茜「……」

里佳子「答えられないか……。つまり、疑っ

てもいるし、信じてもいる」

茜「……(うなずく)」

里佳子「じゃあ、試してみたら？」

茜「試す……？」

里佳子「別れ話を切り出してみるの。それで

相手のリアクションを見る」

茜「そんなこと……」

里佳子「その反応次第で、彼の茜への愛がわかる」

茜「……確かに……それ、いい方法かも！」

里佳子「私がもしも。彼氏いたらそうすると

思う」

茜「里佳子ちゃん、彼氏作りなよ？」

里佳子「いや。難しいよね。さつきも告白さ

れた」

茜「え？ だれだれ？」

里佳子「同じクラス委員の三上くん。たぶん、

すぐくわかりずらかったけど、告白だった

んだと思う……」

茜「ほー。それで？」

里佳子「丁重にお断りしました」

茜「なんで？」

里佳子「なんで、って……」

茜「さては里佳子、他に好きな人が」

里佳子「いない！ というか、いた」

茜「ん？ どういうこと？」

里佳子「昔の話。ずっと今でも好きなのはア

ノ人だけ。中学の時の話だよ」

茜「その人、いまは？」

里佳子「わかんない」

茜「わかんない。って？」

里佳子「正直、避けられている気もするし。

あんまり卒業してから話してないんだよね」

茜「そうなんだ。それは彼待ってるかもよ」

里佳子「待ってないよ」

茜「待ってる」

里佳子「どうしてそんなことわかるの？」

茜「この本」

里佳子「え？ 何？」

茜「恋愛小説。里佳子もこういうの読んで心

の機微を勉強したらいいよ」

茜「茜が差した本を受け取る里佳子。」

里佳子「私には必要ないと思うけど……」

茜「里佳子に恋人出来たらダブルデートでき

るね」

里佳子「気が早い」

茜「そうかな？ 期待できると思うな」

里佳子「……」

茜、立ち上がる。

茜「よし！ 私は浮気調査してくる！」

里佳子「フアイト！」

茜、去る。

里佳子、ベンチに座り、本を見る。

ページを開いて読み始める。

(続)

#7 「恋の駆け引き」

○高校の中庭 5限

翔也がベンチの前にやってくる。
左右を見て、おもむろに座る。

スマホを見て、周りを見る。
再び、スマホを見る。

翔也「来ない。来ない。来ない。一体どうい
うつもりなんだ、茜のヤツ……」

茜がやってくる。

茜「しよーや」

翔也「座れば？」

茜「うーん」

翔也「じゃあ、俺も」

翔也、立つ。

茜「じゃあ座ろ！」

茜、ベンチに座る。

翔也「なんだよー」

翔也もベンチに座る。

茜、立つ。

翔也も立つ。

茜、座る。

翔也も座る。

茜、立つ。

翔也、立つ。

翔也「おい！」

茜「……落ち着け、私（と座る）」

翔也、ゆっくり茜の隣に座る。

翔也（呆れて）で。あのメッセージ、何？ い
きなり別れよ、とかどういこと？

茜「翔也。浮気してるでしょ？」

翔也「……は？」

茜「浮気！」

翔也「してないよ」

茜「してる」

翔也「してない」

茜「した」

翔也「してない」

茜「どれぐらい？」

翔也「してはいない」

茜「どこまでした？」

翔也「いや、そういうことじゃない」

茜「じゃあ、どういうこと？」

翔也「んー。なんか勘違いしてるんじゃないね？」

茜「は？」

翔也「いや。だから。俺が茜以外の女とどう
のこうのなんてあるわけないだろ？」

茜「なんであるわけないの？」

翔也「茜のことが、好きだからだよ」

茜「……」

翔也「な！」

茜の肩を抱こうとする翔也。
するりと交わして立ち上がる茜。

茜「騙されないから」

翔也「は？」

茜「私、見たんだから」

翔也「見たって……何を？」

茜「翔也のスマホ」

翔也「は？」

茜「好きだよ。とか、愛してる。とか。書い
てあったのはなんですか？」

翔也「なんで人のスマホ勝手に見てんだよ！」

茜「話をすり替えないで」

翔也「すり替えてない」

茜「いまは浮気の話」

翔也「いや、プライバシーの侵害だし」

茜「侵害されて困るヤツが言うセリフ！」

翔也「んなことあるか」

茜「じゃあ、あのメッセージは何だったの？」

翔也「……」

茜「説明して」

翔也「それは、練習、だよ」

茜「練習？」

翔也「茜に送る文章を陸人や三上に添削して
もらってたんだ」

茜「添削って……」

翔也「俺、頭そんなに良くないし、言葉とか
うまく言えないし……だから添削」

茜「それが本当の答え？」

翔也「そ。だから、なんもねーよ」

茜「……」

翔也「ってか、俺のスマホ勝手に見た件」

茜「あー。ごめん」

翔也「いや、それこそ信じらんねえーし」

茜「浮気疑ってたから、だから、そういうこ
とってあるじゃん。身辺調査的な。《火のな
い所に煙は立たぬ》って言うし」

翔也「ん？」

茜「だから、疑われるようなことするから、
誤解されるんだってことで」

翔也「俺たち別れよ」

茜「はい！？」

翔也「俺、もつと信頼されてると思ってた」

茜「だから……」

翔也「もつと信頼できる奴と付き合ったらい
いよ。俺は無理！」

翔也、立ち去る。

茜「え！？ 逆にフラれた！？ えーっ！」

(続)

#8 「男子会談」

○高校の中庭 6限

三上と翔也がベンチに座っている。

三上は暗く俯いている。

翔也は空を仰いでいる。

翔也「何が見える？」

三上「何も見えない」

翔也「空は、青いわー」

三上「地面は黒いわー」

翔也「そうかー」

三上「そうだね」

地面をじつと見つめる三上。

空を仰ぎ見る翔也。

陸人が3人分のペットボトルを持ってやってくる。

陸人「お前ら、絶望し過ぎじゃん？」

翔也「お前ら、絶対し過ぎじゃん？」

と、ペットボトルを配る。

翔也「サンキュー」

三上「ありがと」

陸人「俺たちが会議するって、授業サボってまでやることか……？」

翔也「大事な事だろ。恋愛問題だぞ!？」

陸人「それ、三上、ホントよく頑張ったよ」

三上「あ、うん……」

翔也「よく冴木里佳子に告った。お前は偉い！」

三上「うん……。でもフラれるって、やっぱ

り痛いよね。カッコ悪いし……」

翔也「誰も責めないよ。むしろ称えたい！」

陸人「そうそう」

三上「うん……でもやっぱり切ないっていう

か、苦しいっていうか、どうしたらいいん

だろ、これから。また委員で顔合わせし」

翔也「自分の中で決着付けるしかないな」

陸人「彼女のいるやつは言うことが違うな」

三上「説得力ある……」

翔也「あ、でも俺、別れることにしたから」

三上「え？」

陸人「茜ちゃんと!？」

翔也「うん」

陸人「なんで!？」

翔也「別に。気分」

陸人「はあ!？」

三上「モテる男はいいね……。もう次の当て

もあつたりして……」

翔也「いや、さすがにねえけど。好きでもな

いのに付き合ひ続けるのも違うっていうか」

陸人「え？ 翔也、茜ちゃんのこと好きじゃ

なかったの？」

翔也「まあ」

陸人「ウソ!？」

三上「それは信じられない……!」

翔也「告られたから、ノリで。付き合ってた」

三上「ノリって……そんなバラ色の人生を送

っている人間がこの世に存在するなんて!」

陸人「信じがたいよ……本当は何かあつた?」

翔也「別に。恋には始まりがあつて、終わり

がある。ただ、それだけ」

三上「僕も、自分の気持ちにけじめつけない

と、だね」

翔也「そうそう」

三上「なんか整理出来たら、スッキリした。

ありがと!」

翔也「どういたしましてー」

三上「僕、授業出る」

陸人「え……? いまから?」

三上「サボるのって性に合わないから。じゃ

あ、またあとで!」

三上、去る。

翔也「三上はホント真面目だなあ!」

陸人「翔也、お前、本当に茜ちゃん振ったの?」

翔也「まあーなー」

陸人「……俺にはお前がわかんねえよ。俺た

ちに今度の茜ちゃんの誕生日プレゼントと

か相談してたじゃん、サプライズするって」

翔也「……俺、バレたんだよね」

陸人「は? サプライズバレるぐらい……」

翔也「いや、そうじゃなくて」

陸人「え?」

翔也「浮気」

陸人「は?」

翔也「正確にはバレなかったんだけど。なん

か、それで詰め寄られて、重いなって思っ

ちやっただよね。だからこっちから切っ

たみたいなの」

陸人「……それ、本当なのか?」

翔也「まあ、いつでも彼女なら作れるからな。

いつかなーって」

陸人「最低だな」

翔也「何?」

陸人「いや……」

翔也「ずっと、ウジウジした恋愛観の陸人に

は言われたくないな」

陸人「俺は……」

翔也「ここで喧嘩するつもりはねえから」

陸人「まあ。俺も、個人的な事だから、口出

すことじゃないって思うよ」

翔也「んじゃ。俺も授業出るかなーお勉強」

翔也、去る。

陸人「人間不信になりそ……」

(続)

#9 「孤独にロックオン!？」

○高校の中庭 放課後・その1

ベンチに座って本を読む里佳子。

陸人が通り過ぎる。

里佳子、目で追う。

陸人が荷物を持って戻ってくる。

里佳子「りっくん!」

陸人「え……!？」

ビックツとする陸人、里佳子の方を見る。

陸人「冴木……さん……?」

里佳子「りっくん!」

里佳子、笑顔である。

陸人、少したじろいで。

陸人「……いや。その呼び方は……学校では

……というか、困るっていうか」

里佳子「なんで?」

陸人「だって、冴木さん」

里佳子「私、りっちゃん」

陸人「冴木さん……」

里佳子「りっちゃん」

陸人「……それは、そうだけど。そう呼び合

ってたけど。確かに。でもそれは昔の話っ

ていうか。小学校の時の話っていうか」

里佳子「中学校の時もだよ?」

陸人「そうだっけ?」

里佳子「いつの間にか呼ばなくなったけど」

陸人「だよ。そうだよ。呼ばないんだよ。

普通、りっくん、りっちゃん、なんて、こ

の年になって気持ち悪いでしょ!？」

陸人「そうかな?」

陸人「うでしょ!？」

里佳子「なに焦ってるの?」

陸人「いや、別に! そっちこそ、その呼び

方で俺の事呼ぶなんて珍しいっていうか」

里佳子「なんか、ね」

陸人「……なんか、なの?」

里佳子「うん、なんか。いろいろあるから」

本を閉じる里佳子。

里佳子「少し話さない?」

陸人「え……」

里佳子「少し」

陸人「いや、でも俺、三上と翔也待たせてる

し……」

里佳子「いいじゃん。待たせておけば」

陸人「でも……」

里佳子「少しでいいから」

陸人「……何?」

里佳子「となり」

陸人「え?」

里佳子「座って」

陸人「え?」

里佳子「座ってくれたら話す」

陸人「いや……」

里佳子「嫌?」

陸人「いや、嫌ではないけど」

里佳子「座って」

陸人「……座ります」

陸人、里佳子の隣に座る。

陸人「で。話して?」

里佳子「りっくん。小説読む?」

陸人「え? いや。本はしばらく読んでない

かも」

里佳子「そっか」

陸人「なんで?」

里佳子「最近読んでる本にね、想いはあるん

だけどお互いの気持ちを通じ合わない男女

がでてくるの……」

陸人「それで?」

里佳子「なんか私たちがみたいじゃない?」

陸人「は? ……いや。それはないでしょ」

里佳子「なんで?」

陸人「だって、俺たち、りっくんとりっちゃん

んだよ?」

里佳子「だから?」

陸人「だからだよ」

里佳子「だけど?」

陸人「ん……いや、だけど、ではない」

里佳子「そう?」

陸人「つてか、いきなりどうしたの? そっ

ちは冴木里佳子さんじゃないですか。高嶺

の花の美女で、お堅い女子って有名な!」

里佳子「私ってそういう印象なの?」

陸人「そうだよ。男子の間では!」

里佳子「それ、間違ってるよ」

陸人「いや、知ってるけど知らない……」

里佳子「私も、一人の女の子だよ」

陸人「……」

里佳子「これ、貸してあげる(と本を渡す)」

陸人「(受け取ってしまう) え……?」

里佳子「読んだら返して」

陸人「いや、でも……」

里佳子「私は冴木里佳子。だけど、りっくん

にとつては、りっちゃんでいたい」

陸人「……」

里佳子「バイバイ!」

里佳子、去る。

呆然とする陸人。

陸人「なんなんだ、今日は……!」

小説を見る陸人。

(続)

#10 「遅刻の王子様 後編」

○高校の中庭 放課後その2

やってくる智恵。

そわそわしている。

とりあえず、ベンチに座る。

頭を抱える。

智恵「あーっ。今日も彼を待つ。一限は一緒に遅刻して、クラスのみんなに冷やかされて、でも、彼も私もまんざらでもない感じで。いや、私だけかもしれないけど。まんざらでもなくて。くそう。帰りも一緒に帰りたい！なんて贅沢ですか!？」

智恵、立ち上がる。

智恵「よし。もう一周してこよ!」

行こうとする向かいから神谷がやってくる。

神谷「高本。よっす」

智恵「うおっう! 神谷くん! いま帰り?」

神谷「ああ、うん」

智恵「奇遇だね。私も!」

神谷「え? いま教室に戻ろうとしてなかった?」

智恵「そう!？」

智恵の傍白「ヤバイ! 全力で帰るモーションをせねば……!」

神谷「完全に戻る感じ、したけどな」

智恵「全然。そんなことありませーん!」

神谷「そうか?」

智恵「うん! 全然帰るし! っていうか普通に帰る。全力で帰るよね。うん!」

智恵の傍白「よし。押し切ったあっ!」
ベンチに座る神谷、ため息をつく。

智恵「え!？」 神谷くん……どうしたの?」

智恵の傍白「なにになに!? 今度は何!？」

神谷「あ……いや、今日の一限の篠崎先生の態度ひどかったな、って……」

智恵「え? そう?」

智恵の傍白「その話かつ!」

神谷「だって、ああいうの、どうかと思うんだよな。高本とメオトにされたし」

智恵「あー。まあ、そうだよねー私たち夫婦にされて、クラスのみんなも爆笑だったしね。なんだかねーって感じだよね」

神谷「俺は、まあ、そういうこと別に気にしないからいいけど。でも、高本は女子だし、イヤだったろ? そういうの」

智恵「え。私!？」

智恵の傍白「嫌ではないむしろ嬉しかった!」

神谷「ごめん」

智恵「いや。あれは……ないよねえー」

神谷「だよな。好きでもない男子と夫婦にされるとか最悪の最悪だよな。マジでゴメン」

智恵「え……」

神谷「なんか遅刻も俺のせいだし悪かったと」

智恵「えーいや、なにになに? 神谷くんがやまることではないよ。それは確かだし」

智恵の傍白「むしろ幸せいっぱいでした!」

神谷「まあ……悪いのは篠崎か……」

智恵「うん……それに私、嫌ではないよ?」

智恵の傍白「あ!」

神谷「え……?」

智恵「あ! いや! 私もそういう細かい事? 気にしないたちだし。って意味で、深い意味はないっていういか」

智恵の傍白「誤魔化せるか!？」

神谷「そっか」

智恵の傍白「誤魔化せた!」

神谷「じゃあ、メオトコンビってことで逆襲するか!」

智恵の傍白「今度はどういうことお!？」

智恵「また一緒に遅刻するって、こと……?」

神谷「そうそう」

智恵「それ。篠崎先生、また怒りそう……」

神谷「だから逆襲!」

智恵「いいかも!」

智恵の傍白「むしろ幸せなんですけどーいいのかな、いいのかな!？」

神谷「じゃ、俺、帰るわ」

智恵「え……」

神谷「何?」

智恵「私も……帰るとこ、だよ」

神谷「高本は戻るんじゃないの?」

智恵「だからー」

神谷「冗談!」

智恵「もうー」

神谷「帰るか? 一緒に」

智恵「え!？」

智恵の傍白「キター——!」

神谷「っていうか、最近いつもそうなるっているような……」

智恵の傍白「おっと、気づかれてはいけない。ここは冷静に冷静に」

智恵「一緒にいること、偶然にも多いよね。偶然にも」

神谷「ま、途中まで道、一緒だしな」

智恵「じゃあ、帰りますか!」

神谷「おう」

智恵の傍白「キタキタキター——!」

神谷と智恵、一緒に去る。

(続)

#11 「本気の夏がやってくる!？」

○高校の中庭 放課後その3

ベンチに座り、ぐったりしている花音
と董、アイスを食べる。

花音「キーン!」

董「キンキーン」

二人、食べながら……。

花音「あー。今日も終わったねえー」

董「終わったねー」

花音「長かったなあー」

董「半分以上サボってたけどねー」

花音「そうだったっけー?」

董「そうだよー」

花音「暑くてどんよりだわー」

董「頭ボンヤリだねー」

花音「溶けちゃうねー」

董「アイスみたいー」

花音「だねー」

董「だなー」

花音「明日もまたこんな日が続くんかー」

董「繰り返すー」

花音「繰り返すー」

董「これから夏本番だもんなー」

花音「だるいよねー」

董「だるいよなー」

花音「期末はやくおわんないかなー」

董「今度も赤点だったら夏補講だよー」

花音「それだけはいやだわー」

董「夏休みが減るなー」

花音「覚悟しないとダメかなー」

董「どうだろうねー。三上くんに勉強教えて

もらえば? 少しは成績アップするかも」

花音「無理言うなし」

董「そう?」

花音「そうだよー。恋が邪魔して勉強どころ

ではなくなるやつー」

董「そうかー」

花音「そうだあー」

董「でも。今日授業聞いたからうちの頭も

少しはマシになったかもねー」

花音「それなー。0%から可能性ちよっぴり

アップしたなー」

董「だよねー」

花音「ま、今日は満足だ」

董「私もー」

花音「日が長いね」

董「長いねー」

花音「やっぱり思考停止だなー」

董「同じくー」

花音「董、さつきから反復しかしてなくない?」

董「頭回らんのよ、もう。花音だって」

花音「私も。そっか。同じことしか言っとな

いかも」

董「うちら、ダメダメだね」

花音「ダメダメかー」

董「ダメダメえー」

花音「ああ、こんなんでのこの夏乗り切れるの

かなあ」

董「乗り切れないな」

花音「アイスは欠かせないね」

董「これないとホントダメ」

花音「あ。あーっ。頭にキーンときた」

董「また?」

花音「またー」

董もアイスを一口食べる。

花音「あ。キーン!」

董「あ。董も?」

花音「また」

二人、笑い合う二人。

花音「そろそろ帰りますか?」

董「そうだねー」

花音「また明日も来るけどなー」

董「そうだねー」

花音「腰が重いな」

董「そうだねー」

花音「適当だな」

董「そうだねー」

花音「そうだねーしか言っでなくない?」

董「そうだねー。って、万能だな。今気づい

たー」

花音「マジかー」

董「そうだねー」

花音「マジかー」

董「そっちこそー」

花音「マジかー、も万能かも!？」

董「なんか『そうだねー』と『マジかー』だ

けで会話成り立つとか、うちらって……マ

ジ、最高じゃね!？」

花音「そうだねー」

二人、笑い合う二人。

立ち上がる花音。

空を仰いで。

花音「夏に負けるかー!」

立ち上がる董。

空を仰いで。

董「夏に負けなーいー!」

二人、見つめ合って。

そして、もう一度空を仰いで。

(完)